



おおきなかぶ

内田 莉莎子 / 訳
佐藤 忠良 / 画
福音館書店 (1962)



物語のもとロシア民話で、「おじいさんが植えて、とてつもなく大きく育ったかぶ。おじいさん、おばあさん、孫娘、犬、猫、ネズミが、次々と加わって引っ張ると、やっとかぶは抜けました」という実に単純な展開ですが、繰り返しの面白さと必要最小限の簡潔な詞、彫刻家佐藤忠良の力強く骨太な表現によって、刊行以来48年にわたって息の長い人気を保っています。

横長に広がる画面の中で動きまわる人間と動物たちの躍動感。画面からはみ出すほどの巨大なかぶが全画面に効果的に配置され、人や動物との巧みな対比によってその大きさがより強調されます。人物の顔貌や服装にはロシアの民衆の匂いを感じられ、老夫夫妻の手足の彫刻的表現には、土に生きる農民のたくましが示されています。

頁をめくるごとに登場者が順々に増えていき、「うんとこしょどっこいしょ」というかけ声と、「ひっぱって」「ぬけません」という詞の繰り返しは、心地良いリズムを生み、読者は一緒になってかぶを引っ張っているかのような楽しさを覚え、一番ちっぽけなネズミが手伝ったら抜けたというナンセンスな結末に大喜び。表紙は物語のエピソードを描き、こんな大きなかぶをこの後どうしたんだらうという想像力がかきたてられます。絵と詞が一体となって物語の世界にひたりきることのできる、現代日本の絵本界にとって、かけがえのない一冊です。



かばくん

岸田 衿子 / 作
中谷 千代子 / 絵
福音館書店 (1962)



動物園の朝。カメを連れた少年が野菜を抱えてやって来て、目を覚ましたカバの親子と挨拶を交わします。悠然と泳ぐカバとカメの大小の対照の妙。見物の子どもたちの足を見上げるカバからの視線。次の画面は逆に観客の眼から見たカバの様子が描かれます。キャベツを丸のみにする大きな口や、満腹で昼寝する丸々とした巨体。やがて夕焼けの中、少年とカメは別れを惜しみながら家路へ。動物園に青い闇が訪れ、動物たちは眠りにつきます。

詞と絵が緊密に融け合って見事に絵本として形象化された希有な作品です。東京芸大油画科梅原龍三郎教室で中谷と同級だった岸田の詞は、ありきたりの散文ではなく、鮮明な映像感覚と美しいリズムを持ち、優しいユーモアがにじみ出た上質の詩

と言えます。この心地良い詞が動物園の賑わいを楽しげに語り、中谷の清澄な色彩と柔らかな筆致を生かした油彩が、動物たちに豊かな感情と暖かい生命感を注ぎ込んでいます。ペンによる強い輪郭線でカバの身体のヴォリュームや動きが生き生きと捉えられ、動物の生態を徹底的にデッサンして身につけた造形力に基づく画家の厳しい写実の意識が示されます。スイスの児童文学者ヒューリマンに「幼稚と感傷に陥ることなく、とても魅力ある優れた動物絵本」と高く評価されたこの絵本は、日本の創作絵本が海外で翻訳出版される先駆となりましたが、初版から 50年近くが経った今も、その瑞々しい魅力は輝きを失っていません。



～日本を代表する絵本42作品の紹介～



ふしぎなたけのこ

松野 正子 / 作
瀬川 康男 / 絵
福音館書店 (1963)



「山奥の村の昔々の話。たろは竹藪で誕生日のごちそうの竹の子掘り。上衣をかたわらの竹の子に掛けたとたん、その竹の子が突然伸び始めた。慌てて飛びついたたろを乗せて、竹の子はぐんぐんと雲を突き抜け伸びて行く。驚いた村人たちが巨大に育った竹の子を切り倒すと、先端は海辺にまで達した。たろは無事助かり、その後この竹の子が道しるべとなって、村人たちは海の幸を手に入れられるようになった」というお話。民話の語り口を生かした詞と絵は、不安と緊張、そして期待感を織り交ぜ、奇想天外な雄大な空想民話(ほら話)の楽しさに満ちて、読む者の想像力を呼び起こします。従来の外国絵本にない奔放なイメージが高い評価を得、1967年度のプラスチラバ世界絵本原画展(BIB) で大賞を獲得しました。

瀬川康男の描く村人たちのリズムカルな動きと個性的な表情には、絵巻史上最高の傑作『伴大納言絵巻』に相通ずる感覚が感じられます。天空を突き上げる勢いで伸びる竹の子や、切り倒されて横たわる巨大な竹の子の場面では、下から上へ、左から右へと自在に流れる構図が、見開き2ページにわたって流麗な筆致で描かれ、躍動感溢れる人間の生命力の奔出が感じられます。横長画面を有効に活用した絵巻的構成、モノクロのパステル画と美しい彩色の画面を交互に配した印象的なページ立ては、日本の絵本発達史上、大きな意味を持つものと言えるでしょう。



しょうぼうじどうしゃじぶた

渡辺 茂男 / 作
山本 忠敬 / 絵
福音館書店 (1963)



「ある町の消防署。はしご車ののっぽ君、高圧ポンプ車のばんぶ君、救急車のいちもくさんが並んで自慢話に花を咲かせています。片隅に、古いジープを改造したちびっこ消防車じぶたもいますが、大きな働きをする機会も無く、町の子どもたちに見向きもされません。ところがある日、隣村の山小屋に火事が起こり、狭く険しい山道を機敏に走り登ったじぶたの大活躍で山火事を防ぎ、じぶたは一躍子どもたちの英雄となりました。」

強くて大きなものに対する憧れと劣等感、活躍の場を与えられて初めて存在を認められる喜び。幼い頃に誰もが経験することの微妙な心理が、子どもたちの大好きな車を主人公にして、軽快な語り口で明るく描かれています。山本忠敬の絵には、消防車

の赤と背景の渋い黄土色の鮮やかな色彩対比、消防車の精密な写実描写に対する背景の街並の大胆な省略・抽象化など、アニメ・ディレクターあるいはデザイナーとしてのセンスが充分に発揮されています。主役の消防車たちは、ヘッドライトを目玉にして個性的な表情を与えられ、生命を吹き込まれていますが、車を取り巻く人間たちはモノクロの輪郭線だけで表され、脇役に過ぎないことは明白です。ブルーの地に白い輪郭線でラフ・スケッチされた街に飛び出て行くポンプ車のクローズ・アップや、横長の画面を斜めにカットした緑の中の白い山道を、真っ赤なジブタが駆け登る場面などはきわめて印象的です。



さむがりやのサンタ

レイモンド・ブリッグズ / 作・絵
すがわらひろくに / 訳
福音館書店（1974）〈'73〉

「やれやれ また クリスマスカ！」この冒頭部分に、読者は驚かされることでしょう。太陽が降り注ぐ浜辺で、水着姿でくつろぐ夢から、目覚まし時計でたたき起こされたその人が、あのサンタクロース。おまけに、こんなことを言うなんて！

ブリッグズは、ファンタジーの世界の聖なるサンタクロースを、リアルな実在する人物として、現実の世界に描き出しています。でっぷりとした体つきに白い長い髭、おなじみの赤い服に帽子と、見た目は記号的なサンタクロースそのものですが、寒がりやで暖かい場所で過ごすことに憧れている（『サンタのなつやすみ』には、憧れを叶えたサンタの姿が描かれています）、お酒が大好物、そして愚痴を言いながらも一生懸命働いている、そんな人間味溢れるサン

タの姿には、他の作品とも共通する、日々をせせと生きる人間に対する作者の愛おしさが感じられます。

マンガのようなコマ割りで、詞はサンタのセリフだけでテンポよく描かれていきます。コマ割りによって、身支度をしてプレゼントを配りに出かけるサンタの一連の動きを滑らかに映し出すだけでなく、家の断面図を縦に並べた 4つのコマに分けて描くことで煙突の中を歩いていくサンタの動きを追いつ、コマの大きさの対比によって空を駆け抜いていくサンタの姿をダイナミックに見せるなど、その手法が作品世界をより豊かに表現しています。（S）



かいじゅうたちのいるところ

モーリス・センダック / 作
じんぐうてるお / 訳
富山房（1975）〈'63〉

典型的な「行きて帰りしものがたり」。主役のマックス少年は、悪戯が過ぎたため母親に叱られて夕食抜きで寝室に閉じ込められますが、怒りを燃え上がらせると、部屋が森に変わり、海が押し寄せ、彼はそこから船に乗って一年と一日旅をして「怪獣たちのいる島」へ着きます。そこで怪獣たちを手なづけ、思う存分大騒ぎをした後、母親が恋しくなって空想の旅から戻ってくると、テーブルには母親の温かい夕食が待っていた、という物語。

この作品は、子どもの心理や魂の深奥を探ってイメージ化した虚と実の世界が、何の矛盾もなしにスムーズに入れ替わっていくところに絵本としての面白さがあります。注意深く画面を見ていくと、現実＝日常の材料を巧みに使って、ファンタジー＝非日

常の世界を構築しているのがよく解ります。「怪獣たち」は母も含めた大人たち、マックス王のテントは、悪戯の大暴れの際に使ったカーテンと椅子、その命令の言葉は、母の諫めの言葉。それぞれ符合を見つけることができます。少年は困難な現実を想像力によって空想の世界に導き、そこで形を変えて難問を解決させることによって、生のエネルギーを取り戻し、再び現実に戻って来ます。読者もまたマックスと一緒に、彼の夢の中へ引きずり込まれ、そこでの大騒ぎを目撃し、そして彼と共に夢から目覚めたかのような感覚を味わうのです。こどもは、純真無垢で汚れを知らず、無心に遊ぶという旧来のイメージを抱く者は、センダックのこども観には戸惑うことでしょう。



木のうた

イエラ・マリ / 作
ほるぶ出版（1977）

1本の大きな木を中心にして、周りに生きる動物や植物たちの春夏秋冬の様子を追った作品です。しかし決して「知識絵本」ではありません。1枚1枚の場面が、色彩的にも構成も非常に完成度が高く、ページをめくるとに現れてくる、季節の移り変わりが心地よく、自然の中で生かされている生命が、循環して未来永劫に続いてゆくという思想が、題名通りに静かに叙情豊かに歌いあげられています。教科書的な知識偏重の学習では、決して得ることのできない「生命のうた」を、私たちはこの絵本で感じることが出来ます。

一般に絵本では、ズームアップやズームダウン、俯瞰や仰角等の構図、視点の移動など、いわゆるカメラワークによって画面を演出するのが常ですが、この作品では、視点

を固定して全く同一の風景をとらえ続け、拡大も縮小も移動も行われません。そういった技巧を一切使わず、背景の描写も排除し、1本の樹木という対象のみに焦点をあてることによって、読者の想像力や感情を呼び起こす余地を豊富に用意しています。読者は、四季の変化の中で様々な生を営んでいる生き物たちに自己を重ね合わせ、自由に自分の物語を紡ぎ出すことができるのです。

文字のない絵本は、物語が文字で示されない代わりに、読者が絵に描き込まれた情報を解釈し、絵の雰囲気を実感的に捉えながら、独自の詞を紡ぎだす楽しみがあります。この作品はまさにそういったイメージを鮮やかに引き出させる佳品と言えるでしょう。



はらぺこあおむし

エリック・カール / 作
もりひさし / 訳
偕成社（1976）〈'69〉

主人公は、小さな卵から生まれた青虫。お腹がペコペコだったので、果物やお菓子を月曜日から日曜日まで1週間食べ続けて、とうとうお腹が痛くなってしまいます。でも葉っぱを食べると元気になり、身体も大きくなって、さなぎになり、そして綺麗な蝶に変身します。物語自体はとてもシンプルですが、ちっぽけな青虫が色々な食べ物を食べる場面では、画面に丸い小穴を開けて読者の指が青虫になって自由に出入りするような工夫をしかけ、蝶に変身する過程では、見開き一杯に華麗な装飾と大胆にデフォルメした描写で、目を驚かすような美しい画面が作り上げられています。

この絵本が日本で翻訳された当初は、穴あき絵本とか仕掛け絵本の分野に入れられてしまい、多少違和感を持って受け取られ

たようですが、今ではすっかり、こどもたちに人気の古典的名作として定着しています。エリック・カールの絵本の多くは、本来は物語絵本ではなく、知識絵本に属するものですが、知識が前面に押し出されるのではなく、色々な仕掛けを駆使しながら、ストーリー性も重視され、楽しい内容に仕上げられています。この独特の絵肌を持った表現は、実は、ティッシュペーパーに絵具で彩色して、それをカットして貼り合わせるという、コラージュの手法が使われています。そのユニークな手法と、カールの個性的な色彩感覚が、独特の雰囲気を作りだし、見る者の目に柔らかく暖かい印象を与えるのです。